



葉山嘉樹全集

明治27（1894）年

3月12日、福岡県京都郡豊津村にて誕生。

明治33（1900）年 7歳

4月、豊津尋常小学校に入学。

明治41（1908）年 15歳

3月、豊津高等小学校を卒業。4月9日、福岡県立豊津中学校に入学。

大正1（1912）年 19歳

秋頃一つ年下の落合サカエと恋愛、校長の説得により、駆け落ちを思い止まった。

大正2（1913）年 20歳

福岡県立豊津中学校を卒業。3月29日、早稲田大学高等予科文科に入学。保証人の森山致中宅に下宿。学費の為に、実家を売ったが、結局足りなくなり除籍。カルカッタ航路の貨物船に水夫見習として乗船。

大正3（1914）年 21歳

8月1日、模範タイピスト養成所に入学し、11月30日、同所を退学。

大正5（1916）年 23歳

6月5日、日本海員掖済会より『海員手帳』が仮交付された。室蘭～横浜航路の石炭船万字丸に乗船。月給六円。

大正6（1917）年 24歳

この頃、門司市楠六丁目の松野宅に下宿。丸田秀度、高橋虎太郎の紹介で、鉄道院に入り、門司管理局の臨時雇となったが、すぐに止める。9月1日、戸畑の私立明治専門学校の庶務課雇となる。10月20日、中央卸物品監守掛嘱託となった。故郷に帰って結婚。この頃から、『海に生きる人々』に着手。

大正8（1919）年 26歳

4月5日、山井ヒサエとの間に長女タミ子が出生。4月11日、タミ子が死去。6月、庶務課から応用化学科図書係に移った。そこでゴーリキーやドストエフスキーの文学に親しむ。10月、待遇改善で学校当局と交渉する。

大正9（1920）年 27歳

3月12日、山井ヒサエとの間に二女愛子が出生。3月下旬頃、山井ヒサエの山口県の実家に行った帰り、下関駅に近づく列車の中で、親の決めた結婚に反対して熊本の姉の元に行く塚越喜和子と知り合う。山井ヒサエが里より戻り、喜和子とのことで大騒動となる。愛子を引き取り、塚越喜和子と同棲。8月11日、山井ヒサエは中村力との婚姻提出。10月、私立明治専門学校を辞し、柁原真平教授の紹介で、名古屋セメント会社の工務係に雇われた。10月13日、愛子が死亡。

大正10（1921）年 28歳

5月1日、喜和子との間に長男嘉和が誕生。赤尾織之助らが結成した極楽社の同人として参加、5月に機関誌『極楽世界』を創刊。6月上旬、同僚の村井庄吉の事故死を機会に「労働者ノ相互扶助ノ組合」を結成しようとしたが、技師長らに妨害され、名古屋セメント会社を蹴首された。6月15日、「小林橘川氏に」（『新愛知』5月25、26日付）により、小林橘川に認められ、名古屋新聞社に試用として採用、主に社会部記者として労働問題を受け持った。名古屋新聞社入社直後に名古屋労働者協会に加入。この時期「民平」という名前を使用。6月21日、熱田蓬座での名古屋労働者協会主催の労働問題講演会に「我等如何に生きるべきか」を講演。6月22日、大薬師堂での向上会名古屋支部熱田工場労働者入会式に小林橘川らと応援演説。7月29日、御園座での関西労働争議報告批判演説会・示威大行列活動写真会に木村錠吉、胸永太郎らと講演。8月3日、神戸の三菱、川崎両造船所の同盟罷工に、名古屋新聞社より特派記者として派遣され、新聞記者の立場を離れて港川の勸業館などで応援演説をした。8月7日、熱田蓬座での労働問題演説会に「神戸より帰りて」を演説。9月15日、善光寺堂での労働問題演説会に山崎常吉らと演説。9月17日、大薬師堂での向上会支部第三回講演会に河村鶴蔵らと講演。9月22日、大薬師堂での労働講座に「労働組合主義」を講演。10月、名古屋労働者協会の代表として横浜ドック罷工視察応援にいった河村鶴蔵が帰名し、妙見寺で労働演説会を聞き、河村らと演説。10月4日、愛知時計電機職工大会並びに演説会が大薬師堂で開催され、河村らと演説。10月5日、辞表を名古屋新聞社に提出し、愛知時計電機で激励演説をした。舞鶴公園の争議団本部にいるところを門前町署に召喚され、拘禁された。10月8日、名古屋刑務所未決監に収監された。

エッセイ「小林橘川氏に」、『新愛知』、5月。

[エッセイ「工場の窓より」、『名古屋新聞』、6月。](#)

エッセイ「労働者としての立場」、『名古屋新聞』、6月。

エッセイ「二つの道—労働争議の考察—」、『名古屋新聞』、6月。

エッセイ「街路に立ちて—少年の車を轆きつゝ—」、『名古屋新聞』、7月。

エッセイ「街路に立ちて—乞食の老爺に追従して—」、『名古屋新聞』、7月。

エッセイ「街路に立ちて—馬と猿とに聞いた—」、『名古屋新聞』、7月。

エッセイ「街路に立ちて—方角違ひの海の上—」、『名古屋新聞』、7月。

エッセイ「神戸労働争議のエピソード—戦のノートより葉山生—」、『名古屋新聞』、8月。

エッセイ「偉大なる顎と其臨終の苦悶」、『名古屋新聞』、8月。

エッセイ「無産労働階級の宗教的特質」、『名古屋新聞』、9月。

大正11（1922）年 29歳

2月8日、禁錮四ヶ月求刑。7月頃、刑期を終え名古屋刑務所を出獄。労働書店「プロレタリ屋」の屋号で古本の夜店を開く。8月頃、父荒太郎が病気であるため、妻子を連れて豊津村に帰省したが、再び名古屋に戻り、靱山真の潮通信に入社。9月、ロシア飢饉救済義捐金募集演説会を開き、熱田、広小路などで絵葉書を売り、募金活動を行った。このころ、靱山真の家で、東京から田所輝明らを招き、研究会をしばしば開いた。9月30日、大阪で開かれた日本労働組合総連合結成大会に、荒谷宗二、山崎常吉、岩田秀一らと参加。11月、潮通信社が人手に渡り失業。12月11日、二男民生が誕生。年末、父荒太郎危篤の知らせにより一人で帰省、父死去。母親が自殺未遂。エッセイ「労働階級は何を作るか」、『名古屋新聞』、10月。

大正12（1923）年 30歳

2月4日、中区南鍛冶屋町の公民倶楽部で東海普選断行連盟の協議会が開かれ、幹事に選ばれた。2、3月頃、レフト創立協議会が野坂参宅宅で開かれ、名古屋地域より中央委員に選出された。この頃、名古屋赤名会を結成。3月12日、麻裏加工職工70名余りが同盟罷業に突入し、山崎常吉らの求めで、小沢健一らと応援。3月16日、山崎常吉、亀田了介、伊藤長光、三好寛ら麻裏争議の指導者が笹島署に召喚されたが、木曾の恵那郡中津に住んでいた友人馬場寛のところへ素早く逃れた。6月頃から刑事の尾行がついた。6月27日、名古屋共産党事件、検挙される。7月5日、戸谷より高畠素之訳『資本論』第一巻第一～三冊の差し入れを受けた。7月20日、『資本論』第一巻第三冊を読了。9月、名古屋刑務所を出獄。エッセイ「反動新戦術に拮抗する対策」、『労働組合』、7月。

大正13（1924）年 31歳

6月27日、母トミが死去。10月、巢鴨刑務所に服役。

「牢獄の半日」、『文芸戦線』、10月。

大正14（1925）年 32歳

3月中旬、巢鴨刑務所を出獄。妻子が行方不明になっていた。まもなく落合川の発電所工事に従事。5月24日、長男嘉和が死亡。11月15日、次男民雄が死亡。11月1日、「淫売婦」が『文芸戦線』に発表され、一躍新進作家として注目を浴びた。

「淫売婦」、『文芸戦線』、11月。

昭和1（1926）年 33歳

2月、中津町台町の鈴木種苗床店に下宿。3月、文芸戦線同人会議で同人に推挙された。4月、西尾菊江と駆け落ちする。麴町区の光洋館に寄居する。7月1日、「淫売婦」が中国語訳された。この月、東京市外井荻町上荻窪に移住。10月20日、協調会館での講演会に講演。11月7日、新宿駅横本郷パー支店で『淫売婦』『海に生きる人々』出版記念会が開催。11月22日、早稲田大学での社会文芸講演会に講演。同日、帝国大学社会文芸研究会が帝大校内第二学生控所で開催され、山田

清三郎、里村欣三らと講演。研究テーマは「プロレタリア文芸の発生と意義」。マルクス主義芸術研究会に参加。12月11～13日、妻菊江と伊豆・三浦半島に新婚旅行。12月28日、曠野社争議対策演説会に「人道主義の本質」を講演。

「セメント樽の中の手紙」、『文芸戦線』、1月。

「出しやうのない手紙」、『文章往来』、2月。

「それや何だ」、『文芸戦線』、3月。

エッセイ「獄中抜書」、『読売新聞』、3月。

「追跡」、『無産者新聞』、3～4月。

「住むべき処を求めて」、『戦車』、4月。

「労働者の居ない船」、『解放』、5月。

「赤い荷札」、『文章往来』、5月。

「春の悩み」、『文芸市場』、5月。

「正札つき貴婦人」、『女性』、5月。

戯曲「どつちに行くか?」、『文芸戦線』、5月。

『淫売婦』、春陽堂、7月。

エッセイ「新聞紙」、『文芸春秋』、7月。

「糲」、『文章倶楽部』、8月。

「港町の女」、『文芸春秋』、8月。

エッセイ「子供について（偶感）」、『文芸戦線』、8月。

「校正係」、『文章往来』、8月。

「浚渫船」、『文芸戦線』、9月。

『海に生くる人々』、改造社、10月。

「刺された男」、『文芸市場』、10月。

エッセイ「強からず弱からず」、『女性』、10月。

「誰が殺したか」、『文芸戦線』、11月。

エッセイ「プロレタリア芸術運動の位置と任務」、『読売新聞』、11月。

エッセイ「自分を見る一」、『東京毎夕新聞』、11月。

「乳色の靄」、『新潮』、12月。

「プロレタリアの乳」、『改造』、12月。

エッセイ「反抗心について」、『文芸戦線』、12月。

エッセイ「悪い癖」、『不同調』、12月。

エッセイ「「明日」への貢献（私が本作発表した創作に就いて）」、『新潮』、12月。

エッセイ「今年の正月」、『東京毎夕新聞』、未詳。

昭和2（1927）年 34歳

2月、林房雄と文芸家協会に入会。東京市外杉並町高円寺に移住。3月27日、この年設定された渡辺賞を受賞。4月4日の近代文芸思潮大講演会にて「闘争の文学」を講演。5月2日より月末まで

、小説を執筆するため長野県下高井郡角間温泉越後屋に滞在。6月9日、日本プロレタリア芸術連盟拡大中央委員会は、葉山嘉樹ら文芸戦線の連盟員16名を除名。6月12日、新潟新聞社講堂で「今日から明日へ」を講演。7月3日、新興芸術協会主催の文芸講演会が信州で開催され、前田河広一郎、林房雄らと講演。7月10日、労農芸術家連盟第一回文芸講演会が読売新聞社講堂で開かれ、蔵原惟人、平林たい子らと講演。8月14日、千葉県鴨川町の社会文芸講演会に黒島伝治らと講演。8月18日、検閲制度改正期成同盟主催のプロレタリア劇場暴圧批判演説会に演説。10月8日、労農党機関紙応援委員会主催の文芸講演会が国民新聞社講堂で開催され講演。11月21日、長男民樹が誕生。

「生爪を剥ぐ」、『不同調』、1月。

「マドロスと鼠」、『文芸公論』、1月。

戯曲「降つて来た人」、『文芸戦線』、1月。

「誰が殺したか」、『文芸時代』、1月。

「焼けた金で払ふ」、『週刊朝日』、1月。

アンケート「年頭感」、『文芸公論』、1月。

エッセイ「実行期に入った無産者文芸運動」、『読売新聞』、1月。

エッセイ「九州の友（一）」、『福岡日日新聞』、1月。

「印度の靴」、『世界』、2月。

「誰が殺したか（二）—（二人の生ける子供へ）—」、『文芸時代』、2月。

「被害者」、『東京朝日新聞』、2月。

エッセイ「狂人」、『文芸戦線』、2月。

エッセイ「闘ひの芸術」、『大阪毎日新聞』、2月。

エッセイ「九州の友へ（二）」、『福岡日日新聞』、2月。

『浚渫船』、春陽堂、3月。

「誰が殺したか（三）—（二人の生ける子供へ）—」、『文芸時代』、3月。

「躰の話」、『サンデー毎日』、3月。

エッセイ「絵のない絵本—同志、林房雄の短編集を読んで—」、『文芸戦線』、3月。

エッセイ「今様ドン・キホーテ—今東光氏—」、『文芸市場』、3月。

エッセイ「『悲しきインテリゲンチヤ』」、『文芸時代』、3月。

アンケート「大正十五年間に現れたる作品のうち、もっとも記憶に残るもの」、『文章倶楽部』、3月。

エッセイ「片目の仏」、『帝国大学新聞』、3月。

エッセイ「私の創作の気持」、『読売新聞』、3月。

エッセイ「ロシア人は大きいね」、『東京毎夕新聞』、3月。

「死屍を喰ふ男」、『新青年』、4月。

詩「朝は来るのだ」、『文芸戦線』、4月。

エッセイ「東北地方講演旅行記その一」、『文芸戦線』、4月。

「苦闘」、『中央公論』、5月。

「坑夫の子」、『文芸戦線』、5月。

エッセイ「時々雑感」、『文芸時代』、5月。

アンケート「福本イズム批判」、『解放』、5月。

「桜の咲く頃」、『週刊朝日』、6月。

エッセイ「プロレタリアの経済随想―世相さまざま―」、『経済往来』、6月。

「仁丹を追っかける」、『文芸戦線』、7月。

エッセイ「新潟地方行―《プロ芸の共同戦線拒否》―」、『文芸戦線』、7月。

アンケート「最近面白かった映画、私の好きなキネマ女優」、『不同調』、7月。

アンケート「あらゆる材料（作品の材料又は構想を得たる旅の思ひで）」、『文芸公論』、7月。

エッセイ「気になる話―書かねばならぬ―」、『アサヒグラフ』、7月。

エッセイ「足場に足の甲でブラ下る」、『大阪朝日新聞』、7月。

「鼻を覗ふ男」、『新潮』、8月。

アンケート「合評新秋文壇印象」、『読売新聞』、8月。

「天の怒声」、『改造』、9月。

「鼻を覗ふ男」、『新潮』、9月。

エッセイ「ソーニヤ（小説の女性とその挿画）」、『週刊朝日』、9月。

「別離」、『若草』、10月。

エッセイ「蟻の反抗」、『文芸戦線』、9月。

エッセイ「私の描き求めてある女性（私の最も好きな作中の女性）」、『文章倶楽部』、10月。

エッセイ「ビスマルク」、『手帖』、10月。

アンケート「現代活躍せる論客に対する一人一評録」、『随筆』、10月。

エッセイ「到着するのだ」、未詳。

書評「『苦力頭の表情』」、『文芸戦線』、12月。

エッセイ「十一月五日の日記（ある日の日記）」、『新潮』、12月。

アンケート「最近観たもの読んだもの」、『文芸公論』、12月。

エッセイ「何を書いたか（私が今年発表した創作に就いて）」、『新潮』、12月。

アンケート「昭和二年を回顧して」、『読売新聞』、12月。

昭和3（1928）年 35歳

1月30日、労農芸術家連盟の普選対策委員会相談会に出席。2月1日、渋谷公会堂、大崎小学校での加藤勘十政見発表演説会に応援演説。2月28日、読売新聞社講堂で開催された文芸思想講演会に「思ふままに」を講演。5月中旬～6月中旬、長野県下高井郡角間温泉へ民樹の皮膚病を湯治に行った。7月15日、無産大衆党第一回発起人会が牛込神楽坂倶楽部で開催され、鈴木茂三郎らと参加。7月22日、無産大衆党結党式が本郷キリスト教青年会館で挙行され、執行委員に選出された。

「火夫の顔と水夫の足」、『文芸戦線』、1月。

「無風帯を行く船」、『週刊朝日』、1月。

アンケート「今年（昭和三年）の計画・希望」、『文章倶楽部』、1月。

アンケート「反動青年の暴力行為に対する方策如何」、『進め』、1月。

「船の犬『カイン』」、『改造』、2月。

講演要旨「思ふまゝを」、『新興文学』、3月。

「電燈の油」、『文芸戦線』、4月。

「鳴獵」、『文芸春秋』、4月。

エッセイ「荒れた手万歳」、『文芸戦線』、4月。

アンケート「近頃私の愛読して居るもの」、『読売新聞』、4月。

『新撰葉山嘉樹集』、改造社、6月。

「ハンケチ泥棒」、『週刊朝日』、6月。

「暗い顔」、『サンデー毎日』、7月。

エッセイ「『淫売婦』を書いた時の思ひ出（私の出世作（2））」、『文章倶楽部』、7月。

エッセイ「私のヒポコンデリー」、『新愛知』、7月。

エッセイ「ピアノが怖い」、『随筆』、8月。

「独房語」、『文芸戦線』、9月。

「小作人の犬と地主の犬」、『文芸戦線』、11月。

エッセイ「自作に対する世評について（私が今年発表した創作に就いて）」、『新潮』、12月。

昭和4（1929）年 36歳

2月11日、帝大仏教青年会館での文芸戦線講演会に「プロレタリア文学の使命」を講演。5月18～24日、畑中蓼波らの新劇協会が「海に生きる人々」（金子洋文脚色）を上演。7月3日、文芸家協会主催の検閲制度批判演説会が帝大仏青年会館で開催され、金子洋文らと講演。8月、『現代日本文学全集50新興文学集』（改造社）の印税で、ツーリストビューロー主催の大阪商船アメリカ丸で大連、旅順、青島、基隆、台北、長崎、宮崎、函館、札幌、大泊、豊原、千島と日本を周遊した。10月12日、労農芸術家連盟、日本大衆党分裂反対実行委員会主催の文芸思想大講演会が報知新聞社講堂で開催され、向坂逸郎らと講演。

「海底に眠るマドロスの群」、『改造』、1月。

アンケート「一九二九年度に於ける芸術小説と大衆文芸との関係並に発展方向に対する予見」、『近代感情』、1月。

「恋と無産者」、『福岡日日新聞』、1～2月。

「人間肥料」、『文芸戦線』、2月。

エッセイ「私の一日」、『文章倶楽部』、2月。

エッセイ「（「文芸戦線」欄）」、『文芸戦線』、2月。

エッセイ「漫読」、『新愛知』、2月。

エッセイ「郷利基（ゴーリキー）氏へ」、『海上生活者新聞』、2月。

「悪夢」、『週刊朝日』、3月。

アンケート「近来露骨に資本主義的威力を振ひつつあるヂャアナリズムは文芸に如何なる影響を

与へる様になるか』、『文芸レビュー』、3月。

「迷へる親」、『新潮』、4月。

エッセイ「死について」、『文芸戦線』、4月。

アンケート「本年度初期の諸家推薦作」、『文芸レビュー』、4月。

アンケート「大衆とは?」、『大衆』、4月。

エッセイ「一つのリベット（自己を語る）」、『文学時代』、5月。

「波止場の一日」、『週刊朝日』、7月。

『葉山嘉樹集』、平凡社、10月。

エッセイ「私の顔」、『新文芸日記昭和五年版』、11月。

アンケート「来年は何をするか——一九三〇年に対する私の希望・抱負・計画——」、『文学時代』、12月。

アンケート「昭和四年よさらば（一）」、『読売新聞』、12月。

昭和5（1930）年 37歳

6月9日、無産党ファンの会の主催の文芸講演会に平林たい子らと講演。9月、長篇執筆のため千葉県御宿町に滞在。11月24日、労農芸術家連盟を脱退した黒島伝治や山内謙吾らが、文芸戦線読者名簿や文戦劇場の照明用具などの一部を持ち去ったことに憤慨して、黒島伝治を呼び出し、刃傷騒ぎを起こした。

『誰が殺したか?』、日本評論社、1月。

「冬の労働一景」、『文芸戦線』、1月。

「誰が殺したか?」、『改造』、1月。

エッセイ「一九五〇年の売笑婦」、『グロテスク』、1月。

アンケート「選挙に当つて吾等が斯の如き政党或ひは人物を支持する（5）」、『読売新聞』、1月。

「暗い出生」、『新青年』、3月。

エッセイ「労働内閣の可能性」、『中央公論』、3月。

アンケート「私の見た私」、『サンデー毎日』、3月。

『仁丹を追つかける』、塩川書房、4月。

エッセイ「メーデーの集合まで」、『中央公論』、5月。

エッセイ「市電争議雑感」、『文芸戦線』、5月。

「無銭飲食同盟」、『文芸戦線』、6月。

講演要旨「ゴリキイと僕」、『文学時代』、6月。

「袋小路の同志たち（誰が殺したか）」、『改造』、8月。

エッセイ「千島の寒村」、『婦人の友』、9月。

「床屋」、『文学時代』、10月。

アンケート「二十歳の秋」、『文学風景』、10月。

エッセイ「「竜ヶ鼻」と「原」——我が郷土を語る——」、『新文芸日記昭和六年版』、11月。

エッセイ「五月一変なメーデー」、『新文芸日記昭和六年版』、11月。

「けだものの尻尾」、『改造』、12月。

エッセイ「自己短評」、『文芸戦線』、12月。

エッセイ「酒」、未詳。

昭和6（1931）年 38歳

1月28日、新宿の豊竜で日本評論社の文戦派プロレタリア新作長篇小説集出版記念会が開催され、出席。3月31日、長女百枝が誕生。

「サンパンの難破」、『文学時代』、1月。

「母の思ひ出—（長篇「誰が殺したか？」の続き）—」、『文戦』、1月。

エッセイ「（「文芸戦線」欄）」、『文戦』、1月。

「誰が殺したか？—（二通の手紙）—」、『文戦』、2月。

エッセイ「びつくりし続ける」、『文学時代』、2月。

エッセイ「集金人教育」、『東京朝日新聞』、3月。

エッセイ「経済学士の空腹」、『東京朝日新聞』、3月。

「優秀船『狸』丸」、『改造』、4月。

エッセイ「鮑（木曾川流域にて）」、『時事新報』、4月。

エッセイ「急テムポ時代」、『時事新報』、4月。

エッセイ「階級は高い塀を越えて」、『福岡日日新聞』、4月。

「便器の溢れた囚人」、『改造』、9月。

「移動する村落」、『東京朝日新聞夕刊』、9月～7年2月。

エッセイ「東京暗黒街探訪記（里村欣三との「共同調査及制作」）」、『改造』、11月。

エッセイ「裏長屋風景」、『東京朝日新聞』、11月。

エッセイ「マドロスから鋳夫へ」、『新文芸日記昭和七年版』、11月。

エッセイ「高物とロハ物」、『東京日日新聞』、12月。

アンケート「31年の清算」、『時事新報』、12月。

昭和7（1932）年 39歳

1月8日、労農芸術家連盟の執行委員と文学部長を辞任。2月15～19日、麻生久の衆議院総選挙を応援。4月2日、家賃、電気、ガス代が支払えなく、家族を連れて、岐阜県恵那郡中津町の菊江の実家に寄食。7月10日、家族を中津町に残して単身上京。7月14日、左翼芸術家連盟を脱退し、労農文学同盟を創立。8月4日、プロレタリア作家クラブを創立。8月31日、和田堀松ノ木に移住。9月2日、妻子が上京。

エッセイ「労働農民学校」、『女人芸術』、1月。

「歪みくねつた道」、『改造』、2月。

エッセイ「酒と煙草の害について」、『文戦』、2月。

エッセイ「作者より（「移動する村落」）」、『東京朝日新聞』、2月。

「泡になる犠牲」、『会議』、3月。
エッセイ「空地のある風景」、『時事新報』、3～4月。
エッセイ「鬼門について」、『文戦』、4月。
エッセイ「無思索時代」、『国語教育』、5月。
エッセイ「山の町より」、『東京朝日新聞』、5月。
「借家探し奇譚」、『週刊朝日』、6月。
エッセイ「山・川・湖」、『帝国大学新聞』、7月。
「猫の踊り」、『日本国民』、10月。
「夢中時代」、『近代』、10月。
エッセイ「暇のない人々」、『改造』、10月。
エッセイ「遺言文学―無名作家Nの情熱―」、『東京朝日新聞』、10月。
エッセイ「遺言文学―空家に籠つてこの一念―」、『東京朝日新聞』、10月。
エッセイ「遺言文学―これこそプロ文学を守る道―」、『東京朝日新聞』、10月。
「口が重くなる」、『アサヒグラフ』、11月。
「地下水」、『改造』、12月。
アンケート「32年と33年」、『時事新報』、12月。
エッセイ「狂つてゐる時代」、未詳。
エッセイ「調停委員会室」、未詳。
エッセイ「暑い秋から冬」、『婦人世界』、未詳。

昭和8（1933）年 40歳

1月1日、プロレタリア作家クラブの機関誌『労農文学』を創刊。1月27日、堺利彦の告別式に弔辞を述べた。3月28日、葉山嘉樹全集出版記念会が開催。7月20日、大家の訴えにより、杉並署の人事相談所で、立ち退きの白紙委任状を取られた。8月7日、バラックでも自分の家を建てる決心をしたが、友人に土地を借りるが資金が続かなく中断。9月2日、極東平和の友の会の会合で雑談中、田無署に召喚され、翌日、本庁の特高からの取り調べを受けた後、釈放された。10月31日、杉並区馬橋の浅野金蔵宅に移住。

エッセイ「選挙」、『文芸春秋』、1月。
エッセイ「断腸寸語」、『労農文学』、1月。
アンケート「世界からなくしたいもの」、『婦人之友』、1月。
エッセイ「麦は雪の下に（作家生活の苦境を語る（三）（四））」、1月。
『葉山嘉樹全集』、改造社、2月。
「萌芽」、『労農文学』、2月。
エッセイ「インチキ左翼文士を辻切る」、『労農文学』、2月。
エッセイ「堺利彦氏を惜しむ」、『駿台新報』、2月。
エッセイ「堺利彦氏を弔ふ」、『労農文学』、3月。
エッセイ「もう一度やつつける」、『労農文学』、3月。

エッセイ「専門と副業—生活と作品との関係—」、『都新聞』、4月。
エッセイ「天災、地異、人変」、『新潮』、5月。
エッセイ「読者諸兄へのお願ひ」、『労農文学』、5月。
エッセイ「思ふこと二つ—利子をもらつて—」、『東京朝日新聞』、5月。
エッセイ「思ふこと二つ—無くても困る旅の手荷物—」、『東京朝日新聞』、5月。
アンケート「ナチスの焚書を何う見る?」、『時事新報』、5月。
エッセイ「北洋の冬」、『改造』、6月。
エッセイ「再会を歡ぶ」、『労農文学』、7月。
エッセイ「表現の不安」、『駿台新報』、7月。
エッセイ「つゆ空の文学を語る—一人間の屑として—」、『報知新聞』、7月。
エッセイ「つゆ空の文学を語る—作品批判の基準—」、『報知新聞』、7月。
エッセイ「つゆ空の文学を語る—細田民樹の反駁—」、『報知新聞』、7月。
エッセイ「つゆ空の文学を語る—孤墨を守る人々—」、『報知新聞』、7月。
エッセイ「荒畑氏の「戦争論」を読む」、『時事新報』、7月。
「空腹と胃散」、『新潮』、8月。
エッセイ「八月の苦熱下にて—読者諸氏に訴ふること、その他—」、『労農文学』、8月。
エッセイ「前垂れを除れ」、『新潮』、9月。
エッセイ「逆境は傑作を生む」、『労農文学』、9月。
「今日様」、『改造』、10月。
アンケート「創作批評に対する感想」、『新潮』、10月。
アンケート「見え透いた模倣」、『文芸通信』、10月。
「屋根のないバラック」、『文芸春秋』、11月。
エッセイ「藤森成吉に与ふ」、『文化集団』、12月。
エッセイ「「囚はれた大地」について」、『文化集団』、12月。

昭和9（1934）年 41歳

1月6日、三信鉄道工事に従事するため、家族を残し、長野県下伊那郡に赴き、帳付けとなった。2月6日、家族を連れに帰京。7月上旬、中川百助と衝突し、工事から手を引いた。9月27日、『群衆』同人の片桐千尋、原美根らの世話で、海産物問屋の小出小三郎の持ち家へ移住。10月29日、赤穂村鳥ノ木町の高橋医院跡へ移転。同日、上京。11月17日、片桐千尋と伊那町へ座談会に赴いた。

エッセイ「自戒」、『労農文学』、1月。
アンケート「藤森成吉に（年頭に際し我が論敵に与ふ）」、『時局新聞』、1月。
「鳥屋の一夜」、『改造』、2月。
「敷居を盗まれる」、『現代』、2月。
エッセイ「藤森成吉に一遠慮するな、幾度でも—」、『文化集団』、2月。
アンケート「回答一束—訪問者と文学青年に与へる—」、『文芸通信』、2月。

エッセイ「天竜河畔より」、『東京朝日新聞』、3月。

エッセイ「理屈にならぬか」、『群衆』、5月。

アンケート「吾が企図する長篇小説の内容と抱負」、『文芸』、7月。

エッセイ「仔山羊と仔犬」、『東京日日新聞』、7月。

エッセイ「工事雑景」、『改造』、8月。

「山谿に生きる人々―生きる為に一」、『改造』、10月。

エッセイ「脳中低気圧」、『文芸通信』、11月。

エッセイ「寒々とした自語」、『文芸』、12月。

エッセイ「『考へる』こと」、『信濃毎日新聞』12月。

昭和10（1935）年 42歳

3月21日、片桐千尋と西春近村白沢の青年会の座談会に赴いた。3月24日、同人雑誌『信州文化』の創刊を決めた。5月15日、『今日様』の出版打ち合わせのため上京。5月17日、橋浦泰雄を訪ねた。8月23日、『今日様』の出版記念会が赤穂村の丸屋別館で開かれた。11月7日、赤穂村竜生町へ移転。11月17日、上伊那郡西春近村青年会の文芸講演会で講演。

「断崖の下の宿屋―山谿に生きる人々―」、『改造』、1月。

エッセイ「文学の対照」、『信濃大衆新聞』、1月。

エッセイ「文学漫語」、『伊那毎日新聞』、1月。

エッセイ「大連・旅順」、『旅行満州』、1月。

エッセイ「時代を思ふ」、『南信新聞』、1月。

エッセイ「食ひしん坊の話」、『都新聞』、1月。

エッセイ「山村に住みて」、『文学評論』、2月。

童話「お山のお菓子」、『コドモの本』、2月。

エッセイ「私の場合―「離京作家」について―」、『東京朝日新聞』、2月。

エッセイ「『喚き続けて』―島木健作「黎明」改造―」、『帝国大学新聞』、2月。

エッセイ「さて困った（僕のユートピア）」、『文芸』、3月。

エッセイ「銀行地主・家主」、『社会評論』、3月。

エッセイ「浮いてゐる文学」、『中外商業新報』、3月。

エッセイ「信濃に來り住みて」、『博浪抄』、4月。

アンケート「ダイは腐る」、『労働雑誌』、4月。

アンケート「小生の健康法」、『Home Line』、4月。

「水路」、『改造』、5月。

「二重に搾られる」、『文学評論』、5月。

「人間の値段」、『文学評論』、6月。

「小盗不成」、『先駆』、6月。

エッセイ「暗くて寒い初夏」、『早稲田大学新聞』、6月。

エッセイ「「民意」」、『東京日日新聞』、6月。

エッセイ「実利的芸術—近事雑観—」、『駿台新報』、6月。
「窮鳥」、『行動』、7月。
アンケート「文学を志す人のために」、『文学案内』、7月。
アンケート「私は誰のために物を書くのであるか?」、『反対』、7月。
『今日様』、ナウカ社、8月。
エッセイ「山間の峡流地帯」、『社会評論』、8月。
エッセイ「鈴蘭の庭」、『HOME LINE』、8月。
エッセイ「原始に近く（夏の読物）」、『東京朝日新聞』、8月。
アンケート「「文芸統制」をどう見る?」、『文学評論』、9月。
エッセイ「土竜を捕る」、『時事新報』、9月。
エッセイ「巻頭言」、『信州文化』、9月。
「負けた」、『中央公論』、10月。
エッセイ「報告と提唱」、『文学評論』、10月。
アンケート「私の最も影響された本」、『文学案内』、10月。
アンケート「文化擁護国際会議に就ての諸家の感想」、『社会評論』、10月。
エッセイ「『淫売婦』の思ひ出」、『文壇出世作全集』、10月。
エッセイ「文学を思ふ」、『信州文化』、11月。
エッセイ「同人言」、『信州文化』、11月。
エッセイ「責めふさぎ」、『文芸通信』、12月。
アンケート「今年度の作品の新人」、『文学評論』、12月。
アンケート「今年の文壇で最も印象に残った作品・最も活躍した人」、『文芸』、12月。
アンケート「問題にして見たい事」、『文芸通信』、12月。
アンケート「純文学を批判する」、『日本学芸新聞』、12月。
エッセイ「やり切れぬ—農村の生活—」、『駿台新報』、12月。

昭和11（1936）年 43歳

2月12日、上京。加藤勘十の選挙を応援。2月15日、夜行で岡山へ行き、19日まで黒田寿男の選挙応援。2月20日、金子洋文、平林たい子と白浜、勝浦を旅行。8月5、6日、駒ヶ岳に登山。11月26日、泥酔して淀橋署に留置され、翌日釈放。

「赴任命令」、『新潮』、1月。
エッセイ「アメリカからの反響」、『文学評論』、1月。
エッセイ「作者の言分—新年創作評に答へて—」、『時事新報』、1月。
「結婚式」、『改造』、2月。
エッセイ「たい子女史について—「悲しき愛情」を読みて—」、『文学評論』、2月。
エッセイ「山の中より」、『小説』、2月。
エッセイ「作者の言分—二月創作評に答へて—」、『時事新報』、2月。
エッセイ「高原を出でて」、『東京朝日新聞』、2月。

エッセイ「中野重治の印象批評―（中野重治詩集・論議と小品）―」、『文学界』、3月。
エッセイ「底に沈む―林房雄に問ふ―」、『東京日日新聞』、4月。
エッセイ「猫の奪還」、『都新聞』、4月。
「紐のついた命」、『文芸』、5月。
エッセイ「どつちが馬鹿か?」、『文学評論』、5月。
エッセイ「平和な村」、『文芸雑誌』、5月。
アンケート「メーデー禁止についての感想」、『社会評論』、5月。
エッセイ「作者の言分―5月創作評に応へて―」、『時事新報』、5月。
エッセイ「選挙風景」、『飯田新聞』、6月。
エッセイ「真実とは『儲け』ではない」、『飯田新聞』、6月。
「濁流」、『中央公論』、7月。
エッセイ「春日靄想」、『早稲田文学』、7月。
エッセイ「神経病特効薬」、『飯田新聞』、7月。
エッセイ「儲けぬ商売」、『中外商業新報』、7月。
エッセイ「ゴリキイを追慕する」、『文学評論』、8月。
エッセイ「未知のわが師（勝利して逝ける大作家ゴリキイへの寄せ書）」、『文学評論』、8月。
エッセイ「焚付けの値」、『現代』、8月。
エッセイ「日本中絶佳」、『東陽』、8月。
エッセイ「首、魚、どつちをつるか」、『読売新聞』、8月。
エッセイ「続選挙漫景」、『飯田新聞』、8月。
エッセイ「S・O・S選挙漫景」、『飯田新聞』、9月。
エッセイ「文学問答（林房雄に、第二信）」、『文芸』、10月。
エッセイ「感じた事」、『芸術科』、11月。
エッセイ「文学的自伝―山中独語―」、『新潮』、11月。
アンケート「青年に与ふる書」、『ペン』、11月。
アンケート「最も印象の深かつた今年作品」、『文学案内』、12月。

昭和12（1937）年 44歳

2月18日、時局批判演説会が常磐座で開かれ演説。3月1日より15日まで、上京し、鈴木茂三郎、小堀甚二、美和盛吉、中西伊之助らの東京市会議員選挙を応援。4月5日、二女三千枝が誕生。4月15日から20日まで棚橋小虎の選挙演説に松本市に赴いた。4月29日まで、三浦愛二の選挙を応援。7月17日、小出小三郎と飯田へ行き、大松座で加藤勘十と演説。8月1～3日、駒ヶ岳に登山。11月13～18日、妻菊江が三千枝を連れて、田畑を借りる交渉に中津町の実家に帰った。

「登音」、『文芸』、1月。
エッセイ「僕は...」、『文芸』、1月。
エッセイ「打ち明けられぬ病因」、『東京日日新聞』、1月。
「窮鼠」、『日本評論』、2月。

「裸の命」、『改造』、3月。
アンケート「ハガキ回答」、『長篇小説』、3月。
エッセイ「顕かな精神―「パパイヤのある街」改造四月号―」、『帝国大学新聞』、3月。
「出発」、『新潮』、4月。
エッセイ「農村通信」、『東京朝日新聞』、4月。
エッセイ「「海に生きる人々」（長篇名作を書いた頃）」、『長篇小説』、5月。
エッセイ「無粘髭の体面―ある貧しい山村の魅力―」、『帝国大学新聞』、6月。
エッセイ「釣り三昧―信濃の山女魚の魅力―」、『福岡日日新聞』、6月。
エッセイ「釣り三昧―信州の岩魚と九州の鰻―」、『福岡日日新聞』、6月。
エッセイ「釣り三昧―鰻釣りの思ひ出―」、『福岡日日新聞』、6月。
アンケート「ハガキ回答」、『長篇小説』、7月。
エッセイ「村の白痴の思ひ」、『報知新聞』、7月。
エッセイ「平均点的国民の考へ」、『改造』、8月。
エッセイ「忘却の手段」、『都新聞』、9月。
エッセイ「無邪気な泥棒」、『早稲田大学新聞』、9月。
「馬鹿気た話」、『文学界』、10月。
エッセイ「信州通信」、『新潮』、10月。
詩「歌が出来たよ」、『帝国大学新聞』、11月。
「氷雨」、『改造』、12月。
アンケート「昭和十二年度に於て最も印象に残つた作品」、『新潮』、12月。
エッセイ「一寸待て」、『帝国大学』、12月。
エッセイ「萌芽を探る」、未詳。
エッセイ「飯炊きの記」、未詳。
エッセイ「幸か不幸か」、未詳。

昭和13（1938）年 45歳

3月8日、義父西尾伊八から田畑を借り、農業をはじめたが、この年のみで断念。3月29日、岐阜県の鳥屋へ移住。10月14日、中津署に召喚され、県から来た特高の取り調べを受け、翌日釈放された。

「万福追想」、『文芸』、1月。

『山谿に生きる人人』、竹村書房、3月。
「峡底」、『自由』、3月。
「暗い朝」、『改造』、4月。
エッセイ「食ひ気」、『早稲田文学』、4月。
エッセイ「百姓の第一課（東京への手紙）」、『帝国大学新聞』、4月。
エッセイ「土塊」、『東京日日新聞』、5月。
エッセイ「駆出し農夫」、『東京朝日新聞』、5月。

エッセイ「藻の花＝天竜川の山女魚釣り（水を想ふ）」、『東京日日新聞』、6月。

「多角形経営の緒言」、『日本文学』、7月。

エッセイ「馬力計算法について」、『新潮』、7月。

エッセイ「魚を拾ふ話」、『法政大学新聞』、7月。

エッセイ「百姓の手記（鶏糞の熱度）」、『改造』、8月。

エッセイ「天意」、『随筆雑誌』、8月。

エッセイ「（葉書随筆）」、『文芸』、8月。

「子狐」、『新潮』、9月。

「影」、『知性』、9月。

エッセイ「本能」、『都新聞』、9月。

エッセイ「私への註文」、『帝国大学新聞』、10月。

「慰問文」、『文芸』、10月。

「山の幸」、『日本評論』、11月。

エッセイ「鳥屋ぐらし」、『月刊文章』、11月。

エッセイ「米の草」、『改造』、11月。

エッセイ「水の価値」、『同盟通信』、未詳。

エッセイ「黙々と働く」、未詳。

エッセイ「時局偶感」、未詳。

昭和14（1939）年 46歳

5月8日、有馬頼義に捕鯨船乗り組依頼の手紙を出したが実現しなかった。6月28日、二男夏樹が誕生。

『山の幸』、日本文学社、1月。

「雹害」、『新潮』、1月。

エッセイ「流旅の人々―作者の言葉一」、『生活文学選集内容見本』、1月。

『海と山と』、河出書房、2月。

「稲」、『国民新聞』、3月。

エッセイ「創作上閑話」、『帝国大学新聞』、5月。

『流旅の人々』、春陽堂書店、6月。

「部落の顔」、『改造』、6月。

エッセイ「禿頭記」、『革新』、7月。

エッセイ「綿物」、『国民新聞』、7月。

エッセイ「毛が瘡せる話」、『中外商業新報』、7月。

エッセイ「祖国は進む」、『海を越えて』、8月。

エッセイ「山村に生きる人々」、『大陸』、8月。

アンケート「もしあなたが孤島に棲むとすればどんな本を持って行きますか？」、『文芸』、9月。

。

エッセイ「農民は描く」、『東京朝日新聞』、9月。

エッセイ「自然と世間」、『月刊文章』、11月。

「還元記」、『文芸春秋』、12月。

エッセイ「渡り鳥」、『産経新聞』、12月。

エッセイ「農村と都市」、未詳。

昭和15（1940）年 47歳

3月23日、長男民樹が岐阜県立恵那中学校の入学試験を受けたが、面接で、父がプロレタリア作家であるため、入学を拒否された。3月29日、民樹が長野県の私立中学の受験手続きをしたが、同様の理由で拒否された。4月7日、昭和作家選集4『濁流』の印税で、長野県西筑摩郡山口村に、古家を購入し移転。

「墓掘り当番」、『新潮』、1月。

「安ホテルの一日」、『公論』、1月。

エッセイ「群れ行く小鳥」、『知性』、1月。

エッセイ「ボヤ炭を焼く」、『文芸日本』、1月。

エッセイ「百姓の中から一里村欣三兄へー」、『読売新聞』、1月。

エッセイ「山々の煙」、『日本農業新聞』、1月。

『濁流』、新潮社、3月。

エッセイ「鶏肉に倦きる」、『博浪抄』、3月。

エッセイ「吹雪」、『農業日本』、3月。

エッセイ「田の畝から」、『東京朝日新聞』、4月。

「食ひ気と色気」、『大洋』、5月。

エッセイ「山住ひ」、『山と溪谷』、5月。

エッセイ「無心」、『帝国大学新聞』、6月。

エッセイ「半村民」、『都新聞』、6月。

『子狐』、三笠書房、7月。

「話の華」、『文芸』、8月。

「最後の聖餐」、『海を越えて』、8月。

エッセイ「端境期」、『都新聞』、8月。

エッセイ「汗と味覚（夏の味覚を語る）」、『少年保護』、8月。

「凡父子」、『月刊文章』、9月。

アンケート「文学者として近衛内閣に要望す」、『新潮』、9月。

エッセイ「雑草」、『農林新聞』、9月。

エッセイ「炭焼き小屋にて」、『帝国大学新聞』、12月。

エッセイ「狸」、未詳。

昭和16（1941）年 48歳

3月12～18日、東宝で映画「流旅の人々」（高木孝一演出）が上映。8月30日、大阪放送局から島田敬一の朗読で「雑草」「猫の奪還」が放送された。

「潔斎」、『日本の風俗』、1月。

アンケート「はがき回答」、『都新聞』、1月。

「子を護る」、『改造』、2月。

エッセイ「余寒」、『都新聞』、2月。

『葉山嘉樹随筆集』、春陽堂書店、3月。

「寄生虫」、『ユーモアクラブ』、3月。

エッセイ「桃源郷」、『産経新聞』、3月。

エッセイ「蛾の訪れ」、『知性』、6月。

エッセイ「流水の如く」、『改造』、7月。

「義侠」、『中央公論』、8月。

エッセイ「牛がビールを飲んだ話」、『日本の風俗』、8月。

「不思議な村―「義侠」続篇―」、『日本の風俗』、9月。

エッセイ「わが村の身辺風景」、『日本の風俗』、12月。

昭和17（1942）年 49歳

2月14日、「妻喜和子ト協議離婚届出」を発送。2月24日、家屋を抵当に入れ、三百円を借りた。3月1～4日、民樹の栗島商船学校入学試験に付き添って和歌山へ赴いた。3月8～12日、岸田国土や拓務省拓北局の佐分利清に満州や南方の事情を聞くため上京。4月15日、「西尾菊江ト婚姻」を届出。10月8日、翼賛出版協会から六ヶ月の期限で書き下ろし小説を依頼される。11月2～5日、日本文学報国会主催の第一回大東亜文学者大会に出席のため上京。

エッセイ「海員志願」、『日本農業新聞』、1月。

エッセイ「友情」、『早稲田大学新聞』、4月。

「海に行く」、『改造』、5月。

エッセイ「マレー作戦報告を読んで」、『文芸』、5月。

「海に行く」、『新潮』、6月。

『子を護る』、新潮社、9月。

エッセイ「馬探し」、『馬事日本』、10月。

エッセイ「運動会の風景」、『読売新聞』、11月。

「朋あり」、未詳、12月。

昭和18（1943）年 50歳

山口村の満州建国勤労奉仕班の班長として、満州国北安省徳都県双竜泉開拓団へ向かった。奉仕期間は七ヶ月。4月4日、北安からトラックで開拓団に到着。文化指導員となり、奉仕隊員の慰安や、団員の文化向上に務めた。8月15日ごろより下痢をし、黄疸に罹る。新聞に発表した随筆について難詰された。8月31日、肝臓を悪くして、帰国。9月5日、満州より帰宅。9月20ごろまで、

床に臥した。10月26日、「土の生活を語る」をNHK長野放送局から放送。

「多産系子孫分布図」、『職場の光』、1月。

エッセイ「揺ぎなき人たち（わが村から）」、『読売新聞』、3月。

エッセイ「海にささぐ」、『毎日新聞』、3月。

「懸垂」、『少女の友』、4月。

エッセイ「入植記」、『毎日新聞』、5月。

エッセイ「勤労と個性」、『双竜泉開拓新聞』、6月。

詩「医者が来る」、『双竜泉開拓新聞』、6月。

エッセイ「哀別」、『双竜泉開拓新聞』、6月。

エッセイ「満州・第一木曾にて」、『信濃毎日新聞』、6月。

エッセイ「分村の話」、『木曾郷だより』、7月。

エッセイ「歌三首」、『木曾郷だより』、7月。

エッセイ「分村だより一広野に聴く音盤一」、『信濃毎日新聞』、7月。

エッセイ「分村だより一豚に蹴られる一」、『信濃毎日新聞』、8月。

エッセイ「世相一一景（最北開拓団員の会話）一」、『双竜泉開拓新聞』、8月。

エッセイ「馬に乗られる話」、『信濃毎日新聞』、8月。

エッセイ「満州開拓体験記一大自然の美一」、『読売新聞』、8月。

エッセイ「満州開拓体験記一自然と文化一」、『読売新聞』、8月。

エッセイ「満州開拓体験記一生産と文化一」、『読売新聞』、8月。

エッセイ「時局問答」、『双竜泉開拓新聞』、8月。

エッセイ「文化部確定について」、『双竜泉開拓新聞』、8月。

エッセイ「精神と組織」、『双竜泉開拓新聞』、8月。

エッセイ「寂しさと文学」、『双竜泉開拓新聞』、8月。

エッセイ「腹の出来る話」、『双竜泉開拓新聞』、8月。

エッセイ「文化消息」、『双竜泉開拓新聞』、8月。

エッセイ「鯉」、『双竜泉開拓新聞』、8月。

エッセイ「増産戦」、『満州日日新聞』、10月。

ラジオ放送原稿「土の生活を語る」、『NHK長野放送』、10月。

「深井農事指導員」、『旅行雑誌』、10月。

「ある日の開拓村」、『文芸』、11月。

「開拓団に於ける生活」、『農政』、12月。

エッセイ「開拓団と都市」、未詳。

エッセイ「ありのままの記」、未詳。

昭和19（1944）年 51歳

1月2日、田立国民学校で開かれた満州開拓友の会に出席。4月、拓土送出運動に従事。9月7～26日、満州開拓移民慰問視察に、双竜泉に行く。

エッセイ「祖国の大地は培ふ―増産に子弟を前線に一」、『読売新聞』、1月。

エッセイ「帰客」、『東京新聞』、1月。

エッセイ「北満の穀倉」、未詳。

エッセイ「母村と分村」、『開拓』、12月。

昭和20（1945）年 52歳

2月22日、三カ村より満州拓土送出運動の嘱託が解かれた。6月10日、満州開拓団員として、長女の百枝（勤労奉仕隊）を連れて山口村を発った。8月、アメーバ赤痢にかかり、健康を害ねた。10月18日、敗戦により帰国の途中、ハルピンの南方、徳恵駅の少し手前の車中で死去。徳恵駅の近くに埋葬。

葉山嘉樹年表

<http://p.booklog.jp/book/80900>

著者：荒木優太

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/arishima-takeo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/80900>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/80900>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ